

## 名寄市における福祉保健医療連携と子育て支援に関する事業の展開 多世代交流サロンの実践から

傳馬淳一郎<sup>1)\*</sup>, 吉原敦子<sup>2)</sup>, 小銭寿子<sup>3)</sup>, 長谷部幸子<sup>4)</sup>, 加藤千恵子<sup>5)</sup>,  
今野道裕<sup>1)</sup>, 結城佳子<sup>5)</sup>, 鈴木敦子<sup>6)</sup>, 大山有希<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>名寄市立大学短期大学部児童学科, <sup>2)</sup>名寄市健康福祉部こども未来課,  
<sup>3)</sup>名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科, <sup>4)</sup>名寄市立大学保健福祉学部栄養学科,  
<sup>5)</sup>名寄市立大学保健福祉学部看護学科, <sup>6)</sup>名寄市立総合病院精神科リハビリテーション室精神科訪問看護

【要旨】本研究では、2010年度～2011年度に実施した多世代検討委員会による実践の中から「多世代交流サロンひまわり」の様子を中心に、「多世代交流」と「地域に果たす大学の役割」について考察を行った。多世代交流サロンは、普段関わる機会の少ない様々な世代の方との交流によって、参加者がそれぞれの過ごし方を見つけ、居心地の良さを感じる地域の「お茶の間」となっていた。学科の枠を超えた実践は、学生自身が連携の可能性を見出す一方、時間的な制約という課題が明確となった。大学が中心となりながら地域の関係機関と協働で行った本実践は、主体をそれぞれの機関に移しながら新たな展開を見せており、大学の地域貢献の一つのモデルとして寄与することができた。

キーワード：多世代交流，大学と地域，地域の「お茶の間」，学科間連携

### はじめに

#### 1. 少子高齢社会と地域

1993年度に創設された保育所付設地域子育て支援センター事業では、地域全体で子育てを支援する基盤の形成を図るため、活動への企画、調整や育児不安等への相談、支援などを通して、地域の子育て家庭に対する子育て支援を行ってきた(金子 2011。)さらに2007年には、これまで当事者等の活動団体、保育所、児童館が行ってきた事業を地域子育て支援拠点事業として統合、再編(ひろば型、センター型、児童館型)して、2011年度5,722ヶ所ある拠点事業を2014年度10,000ヶ所の設置を目標としている(内閣府 2011。)保育所における子育て支援活動への参画は、保育所に入所している子どもの保護者に対する支援と同様に「地域における子育て支援」として保育士の業務として位置づけられ積極的に取り組むことが求められている(厚生労働省 2008a)

少子高齢化が進む中、誰もが安心して子どもを産み、育てることの出来る社会をつくるためには、子

育て中の親たちを孤立させないような地域での支援活動が必要である。金田は「子育て・子育てに関わる親子のみならず、地域に住むすべての世代の人々が相互に発達的に必要とされ合うような環境」が求められ「世代をこえて必要とされ合う地域づくりが間接的な子育て支援につながるのではないかと、また、そうした地域の創造なしには、子育て支援の個々の施策も、少子化対策につながっていかないのではないか」と述べている(金田ら 2005)。

核家族化の進行は、世帯内の子どもが自立した後の生活にも影響を与える。2008年3月に厚生労働省が発表した「高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議(「孤立死」ゼロを目指して)-報告書-」では、「孤独死」「孤立死」の発生要因の背景として、「多世代同居型から核家族型に変化」「核家族化の進行による小家族化」「借家住まいやマンション居住」「隣近所付き合いの煩わしさから逃れ(略)近隣意識が希薄化」などをあげている(厚生労働省 2008)。

子育て家庭のみならず多くの世帯が、孤独や不安

2012年9月21日受付：2012年9月21日受理

\*責任著者

住所 〒096-8641 北海道名寄市西4条北8丁目1

E-mail: den.jun@nayoro.ac.jp

を家庭内に抱え込まないような地域とのつながりが求められている。

## 2. 大学と地域

公立大学は、構成する学部総数の3分の1強が医療・看護・福祉系であり、地域の要求に応えるかたちで地域医療・福祉の役割を担っている。佐々木(2010)は、これらの大学は社会が必要とする人材を養成するだけではなく、「大学が有する知的資源を活用して診療、保健、介護、福祉など諸活動を実施し、高齢化が進む社会に大きな貢献をしている」と述べる。同時に、「地域との連携活動を通して学生に地域医療やヒューマンケアの精神を涵養する教育上の工夫が様々に行われ」、人材育成に込められていると述べている。

永津(2010)は、「地域貢献は公立大学のアイデンティティ」であると位置付け、その内容を4つのタイプで紹介している。

### 住民のリカレント教育 公開講座、シンポジウムなどの充実

地域活性化を推進するための企業、市民、行政などとの協働

教育機能を地域のフィールドへ 学生のボランティア活動・教育など

大学施設の開放 住民対象の相談室、図書館開放など

「地域とともにつくる」大学は、大学の使命ともいえ、公立大学においては、その期待もより一層大きいといえる。保健福祉分野の中でも「子育て支援」として地域貢献や「開かれた大学」を目指して、既に多くの大学が独自に事業等を実施している(表1)。大学が中心となった「ひろば」「サロン」の実施形態は、プログラムの有無、活動の内容や頻度、機能(子育て相談、親同士の交流、情報提供など)、利用料、教員やスタッフの配置、学生の参加形態等、多様な展開がみられる。これらの先行実践を参考にしながら本学でも「名寄市における福祉保健医療連携と子育て支援に関する児童・栄養・看護・福祉教育と支援者交流事業の展開」として活動を行ってき

た。本研究では、2010年度～2011年度に実施した多世代検討委員会による実践\*の中から「多世代交流サロン ひまわり」の様子を中心に報告し、多世代交流と地域に果たす大学の役割について考察を行う。

## ・本学での取り組みの概要

### 1. 「多世代検討委員会」での議論と地域のニーズ

2010年6月より名寄市立大学保健福祉学部の3学科(看護・栄養・社会福祉)と短期大学部児童学科の教員、名寄市子ども家庭課長を中心として検討委員会を立ち上げ、「子育て支援」「地域づくり」「大学と地域」をキーワードに議論を重ねた。その結果、保健医療福祉の関係職種や市民の方々の声を直接聞く機会としてシンポジウムと座談会の実施に至る。参加者は、保健センターの保健師(母子保健や高齢者の担当者)、市内子育て支援センター担当保育士と園長、町内会の役員、福祉施設関係者、学生など多方面にわたり関心の高さが窺えた。

#### 1) 多世代による地域育てシンポジウム

「育児や介護の孤立をなくすために～お茶の間から、地域交流と多世代支援を考える～」

日時：2010年10月26日(火曜日)13:00～16:00

会場：名寄市立大学

・基調講演「『地域のお茶の間』を核とした地域ネットワークづくり」

講師 社団法人北海道総合研究調査会(HIT)  
寺下麻理

・先行事例報告「多世代支援に活かす地域交流～大学、地域での実践例～」

報告者 多世代による地域育て検討委員会  
傳馬淳一郎

・意見交換・情報提供

名寄市内保健福祉関係者、一般参加者、学生とのディスカッション

#### 2) ひまわり座談会「お茶の間の実践から、名寄市の多世代交流を語り合う」

日時：2011年2月21日(月曜日)10:00～12:00

会場：名寄市立大学 恵陵館3階 ソーシャルワーク室

\*保育所保育指針の第6章では冒頭に次のように明記されている。

「保育所における保護者への支援は、保育士等の業務であり、その専門性を生かした子育て支援の役割は、特に重要なものである。保育所は、第1章(総則)に示されているように、その特性を生かし、保育所に入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭への支援について、職員間の連携を図りながら、次の事項に留意して、積極的に取り組むことが求められる」(2008厚生労働省)

表1. 子育て支援事業実施大学の一部

大学名	開始年	活動グループ	参加対象	活動回数	担当教員の配置 スタッフ	学生の 参加形態	利用料	
新見公立 短期大学	2008年～ オープン	1. 子育て中の親子 交流・活動モデル	子育て中の親子	毎週水・金・土曜日 10:00～16:00	大学教員 地域の子育て支援者	学生の参加	無料(?) 予約不要、初回 時に 登録	
		2. 子育て支援者 に対する専門研修	子育て支援者 一般の方も受講可	随時	大学教員による講座		受講料無料	
		3. 子育て情報発信				子育てカレッジHPの設置		
		4. 将来の子育て 支援者(学生)育成支援				学生に対する講話等 子育て中の母親による経験談 仕事を持つ母親による仕事と家庭の両立 現役保育士による保育所における子育て支援 主任児童委員による子育て相談から見る課題		
		5. 子育てボラン ティア等 連携・育成				「子育て支援座談会」を開催、地域の16団体40名が 参加して討論。新見市社会福祉協議会による親も含めた 子育て支援者や学生も参加しての「子育て支援マップ」 作成中		
		6. 専門的な子育て 相談				地域のネットワークを活かした、保健所等他機関との 連携 現在、検討・準備中		
札幌大谷 短期大学	2005年 より	子育て支援センター つどいの広場 「んぐまーま」 双子の会 「んぐんぐまーま」	地域の親子	毎週木曜日 10:00～15:00	NPO法人 子育て 応援かざぐるまの スタッフ 短大教員	保育科学生 (家族援助論 の演習として も参加)	一家族100円 (保険料相当分 として)	
小田原女子 短期大学	2006年～ 社会福祉 センター内 2008年～ 学内和室等	子育て支援ひろば 「おだっこ」 小田原市との 共済事業	0～3歳の児童と 保護者	月1～2回 各回とも 10:00～12:00	担当指導教員	学生の参加	無料	
愛知県立 看護大学	2007年度 (単年度 事業)	「子育てひろば もり っこやまっこ」 大学体育館を開放	未就園の子ども (6ヶ月児から 3歳児の乳幼児) とその養育者及 び子育て支援団 体及び関係者	平日指定日 (週2日程度) 10:00～15:00	保育者や教員が常駐、学生ボラン ティアや子育て経験があるサポー ター など約10人のスタッフが毎回関わる			
白梅学園 大学	2004年 より	「ひよこの会」 付属幼稚園の園庭 開放(学生参加)	3歳未満児の親子	週1回	グループごとに担 当の教員を数名配 置。学生の実際の 指導は主に実践教 育指導員が担当。 広場当日は保健師 が待機。	7つのグルー プに参加して いる学生が中 心になってGP 学生委員会を 運営。  短期大学の教 養教育科目 (講義2単位) に位置付ける。 (保育科、心 理学科、福祉 援助学科)	無料	
		「子育て広場 きららin白梅」		月1回 (市内NPO法人)				
		「あそぼうかい」 「世代間交流広場」	乳幼児、児童、 保護者、シニア					
		「紅茶の会」 発達臨床型の広場 自由な遊び、保護者 交流、育児相談	地域の保護者 (登録制)	毎月1回				
		「気になる子の広場」		気になる子どもや、 障がいをもつ子ども への理解を深めるた めの学習会、講演会 などを開催				
		「子どもの広場」		市内小中学校の学習 支援や行事のサポー トや「いじめ」につ いての講演会				
「白梅子育て広場 シンポジウム」		地域に向けて「子育 て広場」の実践報告。 スタッフ等の意見交換。						

・これまでの実践報告

報告者 多世代による地域育て検討委員会  
傳馬淳一郎

・意見交換・情報提供

名寄市内保健福祉関係者，一般参加者，学生との  
ディスカッション

3) 市内地域子育て支援センター職員との情報交換  
会

2011年3月17日(木) 13:30～16:00

名寄市東保育所 地域子育て支援センター「さくらんぼ」担当保育士

名寄大谷認定こども園 地域子育て支援センター「ちゅうりっぷ」担当保育士

2. 多世代による地域育て交流事業

保健医療福祉の関係職種や市民の方々と情報交換  
する中で「まずは、集まってみよう」の声に後押し  
されながら，多世代による地域育て検討委員会が中  
心となって，サロンや栄養教室の実施に至る。関係  
者の協力を得ながら，大学施設と市内文化センター  
の施設を活用して実施した。

1) 多世代交流サロン「ひまわり」

会場：名寄市立大学

日時：第1回 2010年11月12日(金曜日)  
10:00～12:00

：第2回 2011年1月28日(金曜日)  
10:00～12:00

参加費：無料

2) 市内栄養士と栄養学科・児童学科学生による栄  
養教室

離乳食をつくってあじわってみよう！

日時：2011年3月10日(木) 10:30～12:30  
2012年3月27日(火) 10:30～12:30

場所：名寄市民文化センター 調理実習室

スタッフ：名寄市立大学教員・学生，名寄市子  
ども未来課栄養士

親子で楽しくおやつをつくらう！ - 幼児の簡単お  
やつづくり -

日時：2011年3月19日(土) 14:00～16:00  
2012年3月29日(木) 14:00～16:00

場所：風連地域交流センター 調理実習室

スタッフ：名寄市立大学教員・学生，名寄大谷認  
定こども園 栄養士

・多世代交流サロン「ひまわり」



図1. 多世代交流サロン「ひまわり」の案内

目的：

地域に暮らす誰でもが気軽に集まって，お茶を飲  
んだり，おしゃべりしたり，自由に過ごせる場所。  
ここでの交流が地域住民同士の関係をより深めるき  
っかけとなることを目指す。

参加対象：

老若男女を問わず，子どもや小さいお子さん連れ  
のお母さん，障がいをお持ちの方も気軽に参加可能。  
参加料：無料。食べ物・飲み物の持ち寄り歓迎。

1. サロンの様子

雲の晴れ間の陽を感じながら「老若男女問わず」  
の通り，様々な世代の方々が訪れた。普段は演習室  
として使用しているソーシャルワーク室も，机，椅  
子を片付けると広い交流スペースに生まれ変わる。  
出来る限り参加者が交流を出来るように，机は近い  
位置に設置した。



子どもと学生

本研究は、平成22・23年度名寄市立大学特別枠支援による研究・事業費の交付を受けて行ったものである。

開始時刻が近づくと乳幼児親子が次々と来場する。その後、一般の方も来場して、一気に賑やかになる。授業の合間を見て参加していた学生も、お母さん方に声をかけながら、子どもたちと遊んでいた。



多世代交流(1)

年配の方は、お茶を飲みながら、テーブルを囲んで会話に花が咲く。子どもたちと直接交わっていない方も、遠くから遊ぶ様子を見つめながら微笑んでいる姿が印象的であった。子どもたちが場所に慣れ、元気に遊び始めた頃、年配の方に「賑やか過ぎて、うるさくないですか」と尋ねると、「家にいると静かだし、見ているだけでもいいもんだね」と心地よさを感じているようであった。なかには積極的に親子の輪に入り声をかけている方もいた。「どんな遊びが流行っているのかな」「知っている手遊びとかはある？おばさんに教えてよ」と子どもに声をかけながら交流を図っている。



お茶を飲みながらの談笑

会場が乳幼児親子とお茶を飲んでいるグループにおおよそ落ち着いたところで、検討委員会のメンバーが「ヨガでもしませんか」と声をかける。使うことがあれば用意していたヨガマットに、何が始まるのだろうかとゾロゾロと興味のある方たちが集ま

ってくる。ストレッチに始まり、足首を回し、ツボを押したりと、即席ヨガ教室が始まった。若いお母さんよりも、お年を召した方の体が柔軟で、思わず笑いがこぼれる。ひと時、子どもから離れて体を伸ばすことでスッキリとしているお母さん方の姿があった。



即席ヨガ教室

その後は、お母さん方もテーブルを囲み、お茶菓子を手に話しに盛り上がっていた。子どもたちも自由に会場を動き回り、普段関わる機会の少ない親以外の大人や学生と世代を超えて人間関係を広げていた。看護学科教員(検討委員会メンバー)が血圧計を持ちながら、「良い機会なので、血圧チェックしてみませんか」とミニ健康診断も行なわれた。普段測る機会のほとんどない方は自分の血圧に驚き、それをきっかけに健康についての話題が盛り上がるなど、話が尽きることはなかった。



ミニ健康診断

事前のミーティングの中で、サロンの最低限のルールを掲示しておく必要があるのではないかと議論があった。そうした使い方や過ごし方も集まった人たちで見つけていくのではないかと結論に至り、当日も入り口の立て看板以外の掲示は特に用意して

いなかった。実際、声を掛け合いながら、お茶を注ぎあい、菓子を手の届く場所に置きあう姿もあり、それぞれが自分なりの過ごし方をしていると感じられた。



集合写真

終了時刻が近づいた頃、次回のお知らせをしてサロンを終えた。会場となった教室が午後から講義で使用することもあり、12時の終了直後から慌しく現状復帰を行わなければならず、余韻に浸る間も無く解散となってしまったが、「またね」と声を掛け合いながらゆったりした雰囲気の中で、会場を後にしていた。

## 2. 参加者の声

交流スペースとして利用できる場所が限られており、エレベーターを設置していない建物の3階が会場であった。参加対象が乳幼児連れの親子や高齢者、様々な障害を抱える方と想定するのであれば、決して望ましい環境とはいえない。その点について、参加していた方々から話題が挙がっていた。「高齢者といえども3階ぐらい昇ってこなければ運動不足になってしまう」というものや「家にいるお爺ちゃんを連れて来たいが3階では到底無理だ」という意見もあった。開催頻度についても、複数の方が単発ではなく「定期的な開催」を望んでいた。



欠かせない茶菓

表2. サロン参加者の感想（子ども連れで参加した母親からのメール）

<p>昨日はサロンありがとうございました。</p> <p>どんな雰囲気か少しドキドキしましたが支援センターとも違いどこか落ち着く空間でした。おばさま達が居るとおやつ食べ放題なので、たのしかったのかいつもは初めての場所からすぐに帰りたがる（子どもの名前）も徐々になれて楽しそうにしていました。</p> <p>子供はもちろん私自身がほのぼのして、普段おばさま達との交流もあまりないので貴重な体験でした。おやつも食べすぎて、もちろんお昼は食べなかったけど毎日ではないし特別な感じでいいのではないかと思います。計画を立ててゲームなどやるわけでもなく自由になんとか関わって楽しめるのもいいと思います。</p> <p>次回も都合がつけば是非参加させてもらおうと思います。</p> <p>ありがとうございました。</p>
<p>今日はありがとうございました。楽しいひとときでした。お姉ちゃんたちにあそんでもらったり、たくさんお菓子もいただけたりと満喫しました。</p>
<p>今日は、最近ギャーギャー泣く ちゃんもたいした場所見知りせずに遊んでくれて、わたしも色々お話しできて楽しかったです。仲間にも教えていただいてありがとうございました。学生さんや職員の方も声をかけてくれたりとあったかい感じでしたごくよかったです。</p> <p>また次回も風邪ひかなかたら参加できたらなと思います。</p>
<p>ちゃんも、学生さんや、おばさま達に遊んでもらえて楽しんでました。お菓子もいっぱいあって私が嬉しかったり。何だかあつという間の2時間でした。 ちゃんもまた行きたい~と言ってたので次も行けたらいいなあと思っています。</p>
<p>ちゃんも、初めて会った、おじさん&amp;おばさんにも遊んでもらって、楽しく過ごせました。 おやつも、たくさん頂いて満腹。楽しい時間を作って頂いて、ありがとうございました。</p>

保育者を目指す児童学科の学生から、お茶菓子を提供していることは、子どもが食べ過ぎて、昼食に影響が出てしまうのではないかと指摘があった。確かに子どもたちは、遊びに夢中になる一方で、「おやつ」にも夢中になっていた。そもそも茶菓は、家庭的な「お茶の間」を意識して用意していたので、今回のサロンには欠かせないものであった。その点に関して今回参加していたお母さん方からは、「毎日ではない、特別な感じで良いのでは」との意見が多くみられた。また、子育て支援センター等とは異なり「計画を立ててゲームなどをやるわけでもなく自由になんとか関わって楽しめて良かった」との意見もあった。「おじさん」「おばさま」がいることで子どもはもちろん、お母さん自身が「ほのぼの」として貴重な体験だったと語っている。お茶菓子を囲んで学生や様々な世代の方の目や手があることは、日々家事や育児に追われているお母さん方がホッと一息つく場になったのかもしれない。



多世代交流(2)

様々な世代の方々が、孤立しがちな「家庭」の枠から一歩踏み出し、同じ場所と時間を共有することは、地域の「お茶の間」として求められる機能であると感じた。会場を見渡したときに、そこに集う全ての方が笑顔で過ごす姿をみて、「お茶の間」やサロンのニーズを強く感じた。

#### ・考察

##### 1. 学科間連携

学科の枠を超えて、それぞれの専門的立場から「子育て支援」「地域づくり」「大学と地域」に関して意見を交わしてきた。その中で、子育て家庭だけではなく、地域のあらゆる方々が、孤独や不安を家庭内に抱え込まないようなシステム作りが必要である

との方向性を見出した。月1回程度の不定期なミーティングであったが、毎回、新鮮なアイデアが提案された。実現の可否を問わず「夢を語り合おう」という段階から、回を重ねるうちに「まずは出来ることから」と具体的な実践が見えてくる。他学科教員と大学について語り合う貴重な機会にもなっており、保健福祉分野の連携教育を語り合う機会となっていた。

今回のサロンでは、学生の参加は多くはないが、「市内栄養士と栄養学科・児童学科学生による栄養教室」では、他学科の学生の存在が「安心」につながり、学生自身が相互の連携の可能性を見出すことを確認した(傳馬ら 2012。)しかしながら、本学のように地域福祉やヒューマンケアに携わる専門職を養成する各学科では、「明確な使命感を持ちながら、国家試験や資格取得に必要なきわめてタイトなカリキュラム」(佐々木 2010)に取り組んでおり時間的な制約も大きい。学科を越えた協働活動のためには「時間的な制約をいかに解決し、学生の活動時間やゼミ間で共有する時間を増やせるか」(浅野ら2010)という大きな課題が残るといわざるを得ない。

##### 2. 地域に開かれた大学

シンポジウム・座談会を通して子育て世代のみではなく、高齢者や障がい者の支援に携わる方々、地域の方々、名寄市で生活する学生から生の声を聞くことができた。そうした声を反映して、多世代交流サロン「ひまわり」を試行的に大学内にて実施した。サロンは2回の開催であったが、参加した方々にとって様々な世代が集う場が、居心地良いものとなり、引き続き大学内や市内での実施を望む声が多く聞かれた。保健福祉の専門職を志す学生にとって参加した様々な世代との関わりは、貴重な経験となっていた。

「こういう機会でもないと大学に来る機会もないし…」との参加者の声からも、大学施設を利用することで、名寄市民の大学として、一歩身近な存在になりえたといえる。

##### 3. 地域への波及効果

多世代交流サロンや座談会に参加していた市内子育て支援センター職員が声をかけあって、市内子育て支援センター共催による初の活動として2011年度に「多世代交流会」が大学にて実施された。子育て支援センター職員が中心となりながら、多世代によ

る地域育て検討委員会がサポートしながら実現したものである。午前中に屋内で交流を図り、昼食は持参したお弁当を大学の中庭で食べた。大学内には、ひと時、子どもの元気な声が響き渡り、通りがかる学生たちも、笑顔で声をかけていた。

2012年度には、市内の子育て支援センターが中心となって、休園になっていた「風連日進保育所活用事業」として「親子お出かけバスツアー」を実施している。名寄市風連日進地区では、子どもの人数も減り中学校は休校、小学校も廃校が決定している。そうした地域の老人クラブの方々には、月に1回大勢の子どもたちが来てくれることを心待ちにしている。はじめは子どもからお年寄りへ、現在はお母さん方からお年寄りへと関わりが広がり、「名寄のおじいちゃん・おばあちゃん」として交流を深めている。秋にはジャガイモを収穫して豚汁を食べ、風連日進地区の方々との運動会も予定されている。

同様に市内の保健センターでは、2012年度より、リハビリで訪れる高齢者と乳幼児健診を受けた親子が、交流する機会を設けている。人見知りで顔を背けてしまう子どももいるが、おじいちゃん、おばあちゃんに駆け寄り笑顔を振りまく子どもたちも多い。

高齢者の方々は、子どもたちが入ってくると子どもに触れながら笑顔で声をかけている。

2011年度・2012年度には、市内保育所・幼稚園の栄養士の協力のもと、子育て親子を対象とした栄養教室（離乳食教室、親子おやつ作り教室）を実施した。児童学科・栄養学科の学生が、参加した親子と直接関わりながら、市内栄養士が進行していき大学教員（地域育て検討委員会）は、施設や材料手配等のコーディネートを行った。学生は多職種連携を実際に学ぶ機会となり、市内の栄養士にとっても、新たな活動や栄養指導のあり方を考えるきっかけになっている。

永津（2010）の紹介する「地域貢献」のタイプにも「地域活性化を推進するための企業、市民、行政などとの協働」「教育機能を地域のフィールドへ」「大学施設の開放」があるが、本学での実践はさらに多くの波及効果が確認されたといえる。これまでの大学が中心となった実践から、既に地域内の保健福祉で新たな活動が始まっている。多世代による地域育て検討委員会発足直後からミーティングの中で、「大学が実践の中心となるのではなく、大学での活動をきっかけとして地域での活動が芽生えていき、

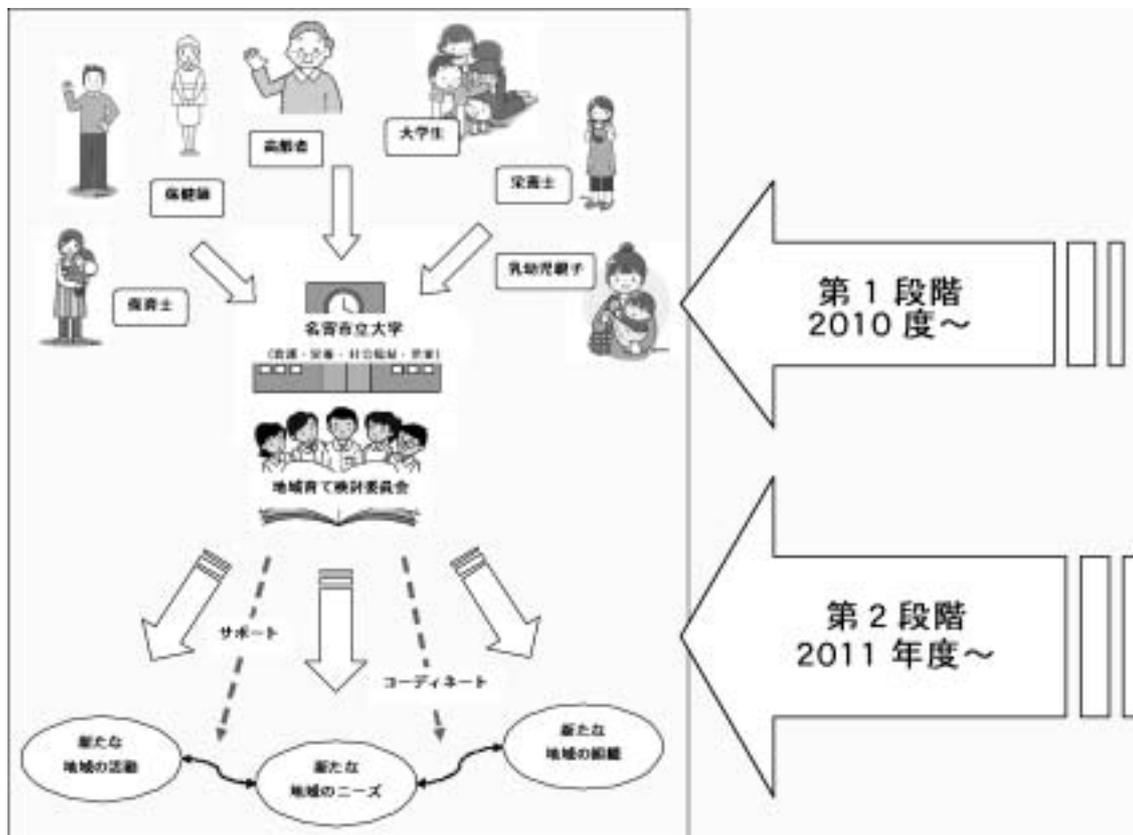


図10．大学（検討委員会）と地域の関係

表3. 本研究・事業の意義と課題

児童・栄養・看護・福祉教育と支援者交流事業の展開に向けて ・多世代交流・地域育てに関する研究・事業の2年間 継続した事業開催の定着と地域資源活用 ・大学・短期大学の各専門養成課程学生や共同研究教員が専門的・多様なスキルを地域に開く 身近な交流と支援者を知る・支援する交流機会の必要へと発展： 単発行事ボランティア 継続交流・連携した支援事業化 ・対象を広げた交流の機会づくりに寄与した意義 地域住民(子ども～高齢者・障害者)のニーズ把握 交流事業の開催場所の工夫や広報活動等 福祉保健医療連携の機運の高まりと関係者の協働性  課題 ・継続的な運営の難しさ...専従者の確保 ・協力組織の確保 ・行政の協力態勢
--

大学教員や学生の人的資源，大学施設等の物的資源を活用しながら，サポートしていく」という方向性で実践を進めてきた。

・まとめ

本研究は，2年間の研究・事業であったが，その意義と幾つかの課題も見えてきた(表3)。関係者や市民の声として，大学を中心とした継続的な活動を求める声も多い。しかし，保健福祉に関わる対人援助の専門職を養成する大学として，実習・演習等のカリキュラムも非常に過密と言わざるを得ない。したがって，学生・教員ともに中心的な役割を担うことは，非常に困難である。

市内に波及した活動は，地域子育て支援センターや保健センターといった主体が存在する。こうした専従者の有無によって，活動の継続性が異なってくる。先行事例を調べる中でも，専従者の有無が継続性に影響を与えていた。ある程度の行政の理解や協力，今回のような大学のサポートやコーディネートが活動を左右すると考えられる。

今回の実践は，主体をそれぞれの機関(地域)に移しながら確実に浸透しつつある。今後も，名寄市立大学として地域とのつながりを大切にしながら，学内での学科連携の動向も見据えつつ，それぞれの機関とのつながりを持っていきたい。現在，多世代による地域育て検討委員会は解散状態にある。しかしながら，2年間の継続事業で結びついた市内および近隣地域の関係機関とは，検討委員会のメンバー

各々がつながりを持つことが出来ている。

本研究は，多世代による地域育て検討委員会を中心としたものであったが，大学と地域の新たなつながりを築く一つの契機として機能したといえる。

文 献

浅野美登里，坂本裕子，中島千恵，落合利佳(2010) 保育士・栄養士をめざす学生の食育実践力，連携力を培う試み．京都文教短期大学研究紀要 49：169-175.

今泉明美，吉田真理，佐藤康富(2007) 養成校における互恵性のある子育て支援の取り組み．小田原女子短期大学研究紀 37：132-146.

大西道子，星信子，清水郁太郎，桑野敏明，柘植純一，入江明美，戸田竜也，山田智子，浜栄子(2008) 札幌大谷短期大学部子育て支援センターの設置の経緯と利用の実績．札幌大谷短期大学紀要 38：37-67.

岡田由香，緒方京，神谷摂子，大林陽子，志村千鶴子，佐久間清美，金尾洋治，高橋弘子，恵美須文枝(2008) 大学を拠点とした子育て支援の取り組み．愛知県立看護大学紀要 4：113-120.

片山啓子，三好年江，芦田英厚(2009) 地域協働による「にいみ子育てカレッジ」の概要と設立過程 大学内子育て支援拠点・新見モデルの発信．新見公立短期大学紀要 29：115-118.

金子恵美(2011) 地域子育て家庭への支援：家庭支援論(網野武博，金子恵美)，全国社会福祉協議会，東京．

金田利子，山路憲夫，瀧口美智代(2005) 大学での「世代間交流広場」の実践 地域における子育て支援・相

互発達をめざして . 白梅学園短期大学 教育・福祉研究センター研究年報 10 : p.4-23.

厚生労働省 (2008a) 保育所保育指針

厚生労働省 (2008b) 高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議 ( 「孤立死」ゼロを目指して) - 報告書 - , p.3-4 ,  
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2008/03/dl/h03288a.pdf> , 2012年9月18日

佐々木雄太 (2010) 改革の時代と公立大学 : 地域とともに  
つくる公立大学 , p.35-37 . 公立大学協会 , 東京 .

傳馬淳一郎 , 今野道裕 (2012) 食育事業を通じた児童・  
栄養学科学学生の協働 ~ 学科間連携と保育士・栄養士の “つ  
ながり” を意識して ~ . 全国保育士養成協議会第51回  
研究大会研究発表論文集 , p.552-553

内閣府 (2011) 多様なネットワークで子育て力のある地  
域社会へ : 平成23年度版 子ども・子育て白書 , p.94-97

永津美裕 (2010) 改革の時代と公立大学 : 地域とともに  
つくる公立大学 , p.37-40 . 公立大学協会 , 東京 .

吉田真理 , 今泉明美 (2009) 地域に根ざす短期大学とし  
ての活動の枠組みに関する考察 ~ 「おだっこ」におけ  
るひろば事業と「みんなで子育てワークショップ」の  
試行を通じて ~ . 小田原女子短期大学研究紀要 39:1-  
13

愛知県立大学 (2012) 子育てひろば「もりっこやまっこ」 ,  
<http://www.nrs.aichi-pu.ac.jp/kosodate/index.php?FrontPage> ,  
2012年9月18日

小田原市 (2012) 子育てひろば おだっこ ,  
[http://www.city.odawara.kanagawa.jp/field/education  
/support/odakko.html](http://www.city.odawara.kanagawa.jp/field/education/support/odakko.html) , 2012年9月18日

札幌大谷短期大学 (2012) つどいの広場 んぐまーま ,  
<http://ngma-ma.boon.jp/> , 2012年9月18日

白梅学園大学 (2005) 白梅子育て広場 ,  
[http://www.shiraume.ac.jp/hp\\_kosodate/index.html](http://www.shiraume.ac.jp/hp_kosodate/index.html) ,  
2012年9月18日

新見公立短期大学 (2012) にいみ子育てカレッジ ,  
<http://blog.niimi-college.jp/kosodate/cms/html/> ,  
2012年9月18日